

受験番号				

次の文章は、植木行宣氏の「ヤマとホコ」という論文の冒頭部分文章である。文章をよく読んで、問いに答えなさい。

奈良盆地に美しい山容をみせる三輪山は、山そのものが神とされる。大神神社が神殿を持たないのは三輪山を神としてきたからである。山そのものを神とするこうした神体山は全国各所にあり、聖地として人の立ち入りを厳しく禁忌する。神霊の鎮まる聖なる山の信仰はわが国古来のものであり、ヤマやホコはそうした心意を背景とする依代であった。

古代都市京都にいち早く展開した賀茂祭り（葵祭り）は、見られる祭礼の嚆矢であるが、祭りに先立ち、賀茂両社（下鴨・御祖神社、上賀茂・別雷神社）はそれぞれに御蔭祭り、御阿礼祭りをを行う。聖なる山から神を迎える神事であり、御阿礼祭りはいまでも深夜の秘儀となっている。元慶八年（八八四）の太政官符は、御阿礼の山を「神山」といい、その「穢蹟」を厳禁している。賀茂祭りの神は、「神山」に生れ、迎えそして祭られる神だったのである。常設の神殿があり、神はそこに常におわすと考える現在にあつては、まことに不可思議な話だが、かつて神は祭りにおいて出現し、祭られては去るものであった。その古風がここに伝えられているのである。

神は去来する。その神が依る神座は時と場に応じて変化した。御蔭祭りのように神馬の背に立つ一本の神もあれば、象徴化された幣束、さらには神輿のように工芸的なものまである。ヤマ・ホコもその一つであり、それが形態や装飾に趣向をこらした作り物へ展開したのが山鉾にほかならない。

ホコは矛と融合したが、本来は聖なる柱を意味した。七年に一度の信州諏訪の御柱祭りは、山から聖木を伐り出し、木遣りで囃して曳き歩き、柱としてそれを神殿の四周に立てるといふ神事である。御柱は枝を払い先端を三角に切り出した大きな縦（註）の丸太に過ぎないが、伊勢神宮の心の御柱と同じ意味を帯びたものであり、神の依るホコの典型とされる。

これに対しヤマは、松など常磐木一本でも十分だが、平安時代の大嘗祭における標山（しのみやま）がその典型とされている。標山は山形に「梧桐」や「恒春樹」を立て、日月や五雲を配し西王母などの人形を飾った造り山である。趣向は中国の故事にちなむものが多く、悠紀・主基の東西二基がその度ごとに製作され、内裏の祭場まで曳行された。『貞観儀式』には、標山製作の建物が「広さ方四尺、高さ三丈八尺」とみえ、総高十メートルを超える大きな規模であったことが知られる。標山は移動式の神座であり、都大路を祭場に曳く行列ははやく都人士女の物見の対象ともなっていた。

しかし、こうしたヤマ・ホコの流れが、山・鉾という祭りの造型として、恒常的に現れるのは鎌倉末期のことである。京都の祇園御霊会がその舞台であり、山・鉾はそこで、町を生活拠点とする市民の成長と風流という風潮を背景に発展し、都市祭礼を特色づける山鉾の祭りをつくりあげたのである。

出典：植木行宣著「山鉾の祭りの成立と発展」、『長浜曳山祭総合調査報告書』滋賀県教育委員会, p243, 1996

注：縦（もみ）

令和4年度 倉敷市立短期大学 専攻科（服飾美術専攻）
入学試験（一次募集）
小論文問題

受験番号				

- 問1. 「ヤマ」とは何か。80字以内で説明せよ。
- 問2. 「ホコ」とは何か。120字以内で説明せよ。
- 問3. 本文章に記された日本の祭礼や祭礼に係る思考様式は、21世紀の現代社会において如何なる点で有効であろうか。あるいは逆に、時代錯誤なものになったと言えるのであろうか。いずれかの立場に依って持論を500字以内で記せ。